

大ヴァシリイの聖體禮儀（輔祭なし）

【重聯禱】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い  
我等皆 總を全うして曰わん、我等の思を全うして曰わん、

しゅあわれめよ。  
主憐

司祭) しゅぜんのうしゃ われつそ かみ なんぢ いの き い あわれ  
主全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、

しゅあわれめよ。  
主憐

司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ  
神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主憐 主憐 主憐

司祭) 又我が國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主憐 主憐 主憐

司祭) またきょうかい つかさど そんき われら せんにほん ふしうきょう およ お  
又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於

けることごとくの我等の兄弟の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主憐 主憐 主憐

司祭) またわれら けいてい しょしきい しょしゅうどう しさい よ われら しゅうけいてい  
又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟

ためいの  
の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主憐 主憐 主憐

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ よ  
又恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正教の総主教、この聖堂の建立者、及

び已に寝りしことごとふそけいてい こところ しょほう ほうむ せいきょう ものため  
び已に寝りし 悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲

いの  
に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主憐 主憐 主憐

司祭) またこそ しそん せいどう もの たてまつ せんぎょう おこな これ ろう これ うた およ  
又此の至尊なる聖堂に物を 獻り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌い、及び

ここに立ちて爾の大にして 豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主憐 主憐 主憐

(※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐れめ、主憐れめ、主憐れめよ。」と応えて歌う。)

司祭) ( 黙誦: 主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに

よ われら あわれ なんぢ めぐみ われら およ なんぢ ゆたか あわれみ あお なんぢ たみ  
因りて我等を憐み、爾の惠を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の民

つかわ たま  
に遣し給え、 )

司祭) けだしなんぢ じれん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま  
蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

いつ よよ  
も何時も世世に、



しゅあわれめよ。  
主憐

司祭) しんじや けいもうしゃ ため いの ねがわ しゅ かれら あわれみ た  
信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



しゅあわれめよ。  
主憐

司祭) しんじつ ことば もつ かれら けいもう  
眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、



司祭) 義の福音經を彼等に啓かん、



司祭) 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、



司祭) 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、

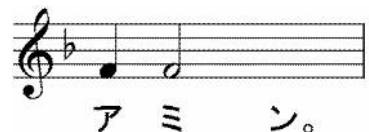


司祭) ( 黙誦: 主我が神、天に居り、爾が悉くの造工を顧る者よ、爾の僕・啓蒙

者・其首を爾の前に屈めし者を顧み、彼等に軽き荷を予え、彼等を  
なんぢせいきょうかいとうとしたいかれらふくせいよくばんしょざいゆるしふ  
爾が正教會の尊き肢體となし、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不  
きゆうころもたまなんぢわれらまことかみしたいたまたかれら  
朽の衣を賜いて、爾我等の眞の神を識るを致させ給え、 )

司祭) ねがわかれらわれらともなんぢちちこせいしんしそんしえいなさんよういまいつ  
願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何時

よよ  
も世世に、



### 【信者の聯禱1】

司祭) 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信

じゃまたまたあんわ しゅ いの  
者復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ。  
主憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、

しゅあわれめよ。  
主憐

司祭) 睿智、

司祭) ( 黙誦: 主よ、爾は我等に此の大なる救の機密を示し、爾は我等卑微にして堪

えざる爾の僕に、爾の聖なる祭壇の奉事者となるを許し給えり、求む爾が

せいしんちからもつわれらこほうじたもの われらていざいなんぢせい  
聖神の力を以て、我等を此の奉事に堪うる者となして、我等が定罪なく爾の聖

こうえいまえたなんぢさんびまつりささいたたまけだしなんぢしゅう  
なる光榮の前に立て、爾に讃美の祭を獻ぐるを致させ給え。蓋爾は衆

ちゅうばんじおこなものしゅわれらつみしゅうじんあやまちためささところ  
中に萬事を行う者なり、主よ、我等の罪と衆人の過との爲に捧ぐる所

われらまつりなんぢまえいよろものえたま  
の我等の祭が爾の前に納れられ喜ばる者となるを得せしめ給え、 )

司祭) 蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

アミン。

## 【信者の聯禱2】

司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、

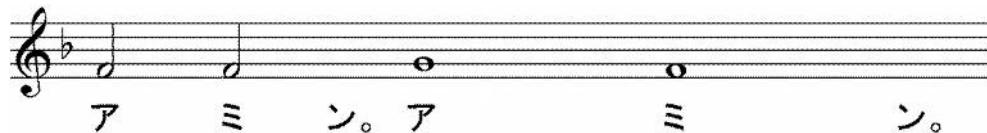
しゅあわれめよ。  
主憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、

しゅあわれめよ。  
主憐

司祭) 睿智、

司祭) ( 黙誦: 神・慈憐 宏恩を以て我等の卑微を顧み、我等卑微にして罪ある爾の堪え  
 ざる僕を爾が聖なる光榮の前に立てて爾の聖なる祭壇に奉事せしむる主よ、  
 爾が聖神の力を以て我等を此の奉事の爲に固め、我等の口を啓き言を賜  
 いて、獻げんとする祭品に爾が聖神の恩寵を呼ばしめ給え、 )  
 司祭) 我等常に爾が權柄の下に護られて、光榮を爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、  
 今も何時も世世に、



【 ヘルヴィムの歌 】

わ我れら等つ慎んでヘルヴィムにのつたり、ヘルヴィムに  
 の法の法、  
 せ聖いさ三んのう歌た  
 をい生のち命をほ施  
 二すのせ聖いさ三ん

しゃ  
に  
た  
て  
ま  
つ  
り  
  
 者  
獻  
て  
、  
  
 こ  
の  
よ  
の  
つ  
と  
め  
  
 此  
世  
勤  
、  
  
 を  
し  
り  
退  
、  
  
 し  
り  
ぞ  
く  
ベ  
し  
。

司祭) ( 黙誦: 肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は

近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大に

して畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性を

易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰なるに縁

りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、爾は獨

天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィムの主、イズラ

イリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾獨善にして善く納

るものいのわれつみたなんがぼくかえりわたましいこころよこしまるる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が靈と心とを邪な

しりよりきよわれしんびんおんちょうこうむものなんがせいしんちからよこしまる思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、爾が聖神の力に藉りて、此

の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨なる聖體至尊なる聖血の機密を

おこなうに堪うる者となし給え、蓋我首を屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の

かんばせわれさなかわれなんがぼくしゅううちしりぞなかすなわちわれつみ顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却くる勿れ、乃我罪

ありて當らざる爾の僕に此の祭物を獻ぐるを致させ給え、蓋ハリストス我が神

よ、爾は獻する者と獻ぜらる者、受くる者と頒たるる者なり、我等光榮を爾と

なんぢ むげん ちち  
爾の無原の父と しせいしそん いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ  
至聖至善にして生命を 施す爾の神とに獻ず、今も何時も

よよ  
世世に、 )

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた  
司祭) ( 黙誦：我等奥密にしてヘルヴィムを 像り、聖三の歌を生命を 施す三者に歌い

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばん  
て、今此の世の 慮 を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬

ゆう おう いただ よ  
有の王を 戴 かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた  
我等奥密にしてヘルヴィムを 像り、聖三の歌を生命を 施す三者に歌いて、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばんゆう  
今此の世の 慮 を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬有

おう いただ よ いただ よ  
の王を 戴 かんとするに縁るを 戴 かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリル

イヤ、

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた  
我等奥密にしてヘルヴィムを 像り、聖三の歌を生命を 施す三者に歌いて、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばんゆう  
今此の世の 慮 を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬有

おう いただ よ いただ よ  
の王を 戴 かんとするに縁るを 戴 かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリル

イヤ、

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ  
神よ、我罪人を淨め給え、神よ、我罪人を淨め給え、神よ、我罪人を淨め

たま 給え、 )

## 【 大聖入 】

ねがわ しゅ かみ そのくに おい わくに てんのうよくに つかさど もの つね きおく  
司祭) 願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を 司る者を恒に記憶せん、

いま いつ よよ  
今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきよう  
願くは主・神は其國に於て、教會を 司る尊貴なる我等の全日本の府主 教

つね きおく いま いつ よよ  
セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきよう ふしゅきよう ふ  
願くは主・神は其國に於て、已に寝りし府主 教 セルギイ、府主 教 イリネイ、府

しゅきよう ふしゅきよう ふしゅきよう だいしゅきよう しゅ  
主 教 ウラディミル、府主 教 フェオドシイ、府主 教 ダニイル、大主 教 ニコライ、主

きよう しゅきよう およ こと きおく われら すで ねむ かぞく  
教 ニコライ、主 教 ペトル、( 及び殊に記憶せらるる 某 ) 我等の已に寝りし家族、

けいていしまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ  
兄弟姉妹、諸の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら（ およ こと き  
願くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストス等（及び殊に記

おく 憶せらるる 某）を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

ア ミ ン。  
か 神 み の な み い る つ か い  
は み 見 え す し て に な い た て ま  
つ る 、 ば んぶ つ の つ か  
さ を い た だ け ば な り。  
ア リ ル イ ャ 、 ア リ  
ル イ ャ 、 ア リ ル イ  
ヤ 、 ア リ ル イ ャ 。

司祭) ( 黙誦: 尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、淨き布に裹み、香料にて

おお 覆い、あらた はか おさ  
新なる墓に藏めり、

ハリストスよ、爾は神なるにより、體にて墓に在り、靈にて地獄に在り、右盜

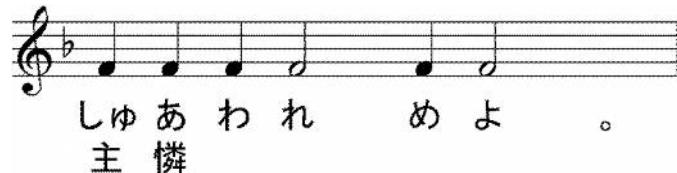
ともてんどう あ ちち せいしん とも ほうざ あ かぎり もの いつさい み たま  
と偕に天堂に在り、父と聖神と共に寶座に在り、限なき者として一切を満て給

えり、

ハリストスよ、我が復活の泉たる爾の墓は、生命を施す者、地堂より美し  
 ものじついかおうみやかがやものあらわき者、實に如何なる王の宮よりも耀ける者と顯れたり、  
 とうど尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、淨き布に裏み、香料にて覆い、  
 あらた新なる墓に藏めり、  
 主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給え、其  
 ときなんぢぎまつりささげものやきまつりよろこうそのときひとびとなんぢさいだん  
 時に爾義の祭、獻物と燔祭を喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に  
 こうしそな犧を奠えんとす、 )

### 【 増聯禱 】

司祭) 我等主の前に吾が禱を増し加えん、



司祭) 獻げたる尊き祭品の爲に主に禱らん、



司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん  
 ん、



司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが爲に主に禱らん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭) 此の日の 純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、

しゅ たまえよ。  
主 賜

司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、

しゅ たまえよ。  
主 賜

司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

しゅ たまえよ。  
主 賜

司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

しゅ たまえよ。  
主 賜

司祭) 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ たまえよ。  
主 賜

司祭) 我等の生命の終がハリストニアニに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び  
ハリストスの畏るべき審判に於て宣しき對をなすを賜わんことを求む、

しゅ たまえよ。  
主 賜

司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤ

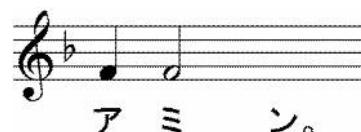
と、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉く

の我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ なんぢに。  
主 爾

司祭) ( 黙誦: 主我が神、我等を造りて此の生命に入れ、我等に救の道を示し、我等に天  
 上の奥密の啓示を賜いし者よ、爾は爾が聖神の力を以て、我等を此の奉  
 事の爲に立て給えり、求む主よ、我等が爾の新約の奉事者爾の聖機密の役  
 者となるを嘉し、爾が慈憐の多きに因りて、我等爾の聖なる祭壇に近づく者を  
 納れ給え、願くは我等は、我が罪と衆人の過との爲に、爾に此の靈智なる  
 無血の祭を獻ぐるに堪うる者とならん、祈る爾之を爾の聖なる天上の無形  
 の祭壇に置き、馨香として之を享け、我等に報ゆるに爾が聖神の恩寵を降す  
 を以てせよ、神よ、我等に臨み、此の我等の奉事を顧みて、之を享くること、アヴ  
 エリの獻物ノイの祭、アブラアムの燔祭、モイセイとアロンとの神職、サムイ  
 ルの和平祭を享けしが如くせよ、主よ、爾曾て聖使徒より此の眞の奉事を享け  
 しが如く、我等罪なる者の手よりも、爾の仁慈を以て此の獻物を享け給え、此  
 くの如く、我等を玷なく爾の聖なる祭壇に奉事せしめて、我等に爾の義なる  
 報の畏るべき日に於て、忠にして智なる家宰の賞を得るを致させ給え、 )

司祭) 尔の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神  
 ともあがほ  
 と偕に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



【ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信経】

司祭) 衆人に平安、



司祭) 我等互に相愛すべし、同心にして受け認めんが爲なり、

ちちとことせいしんの、いったいにし  
父 子 聖 神 、 一體

てわかれざるせいさんしやを、  
分 聖 三者

司祭) 黙誦: 主我の力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の  
力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の力よ、我  
爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常聖の者よ、我等を憐めよ、)

司祭) 門、門、敬みて聽くべし、

われしんず、ひとつのかみちぜんのうしゃ、てん  
我信 一 神 父 全能 者 天

とち、みゆるとみえざるばんぶつをつくりし  
地 見 見 萬物 造

しゅを、またしんず、ひとつのはじゅイイススリストス  
主 又 信 一 主

かみのどくせいいのこ子、よろづよのさきに  
神 獨 生 子 萬 世 前

ちちよりうまれ、ひかりよりのひかり、まこ  
父 生 光 光 真

とのかみよりのまことのかみ、うまれし  
神 真 神 真 生

ものにてつくられしにあらず、ちちといつ  
者 造 非 父 一

たいにしてばんぶつかれにつくられ、われ  
 體 萬物 彼 造  
 らひとびとのため、またわれらのすくいのた爲  
 等人 人 爲 又 我 等 救  
 めにてんよりくだり、せいしんおよびどうて貞  
 天 降 聖 神 及 童 貞  
 いぢょマリヤよりみ身をとりひととなり、わ我  
 女  
 れらのためにポンティピラトのときじゅうじかに  
 等 爲 時 十 字  
 くぎうたれ、くるしみをうけほうむら  
 釘 苦 受 葬  
 れ、だいさんじつにせいしょにかないてふく  
 第 三 日 聖 書 應 復  
 かつし、てんにのぼり、ちちのみぎにざ坐  
 活 天 升 父 右 坐  
 しこうえいをあらわしていけるものとせ  
 光 榮 顯 生 者 死  
 しものとをしんぱんするためにもたきたり、  
 者 審判 爲 還 來  
 そのくにおわりなからんを、またしんず、せ  
 其 國 終 又 信 聖  
 いしんしゅいのちをほどこすものち父ちよりい  
 神 主 生 命 施 出

で、ちちおよびことともにおがまれほめら  
れ、よげんしやをもってかつていいしを、また  
しんず、ひとつせいなるおおやけなるしとの  
きょうかかいを、われみとむ、ひとつせんれ  
い、もってつみのゆるしをうるを、われの  
ぞむししゃのふくかにつ、ならびにらいせい  
のいのちを、アミン。

【 アナフォラ 奉獻 】

司祭) 正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる獻物を奉らん、

へいわとあわれ  
平和憐  
りを。

司祭) ねがわわしゅ めぐみかみちちいつくしみせいしんしたしみなんぢしゅう  
願くは我が主イイススハリストスの恩、神父の慈、聖神の親は、爾衆  
人と偕に在らんことを、

なんぢのしんとも。  
爾神

司祭) こころうえむか  
心上に向うべし、



司祭) しゅかんしゃ  
主に感謝すべし、



司祭) ( 黙誦: えいざい しゅさい しゅ かみ ちち ぜんのうしゃ おが もの なんぢ さんび なんぢ  
永在の主宰・主・神・父・全能者・拜まるる者よ、爾を讃美し、爾

かしょう なんぢ さんよう なんぢ ふくはい なんぢ かんしゃ なんぢひとりじつざい  
を歌頌し、爾を讃揚し、爾に伏拜し、爾に感謝し、爾獨實在す

かみ さんえい かいご こころ けんび たましい もつ なんぢ これいち ほうじ  
る神を讃榮し、悔悟の心と謙卑の靈とを以て、爾に此の靈智の奉事を

ささ 獻ぐるは、誠に當然に誠に義にして、誠に爾が聖位の威嚴に適えり、

けだしなんぢ われら なんぢ しんじつ し たま しゅ しゅさい だれ よ なんぢ  
蓋爾は我等に爾の眞實を知るを賜いし主なり、主宰よ、孰か能く爾の

のうりよく い なんぢ ことごと さんび つた なんぢ しょじ しょきせき の た  
能カ力を言い、爾が悉くの讃美を傳え、爾が諸時の諸奇蹟を宣ぶるに堪

なんぢ ばんゆう しゅさい てん ち み み ばんぶつ しゅ こうえい ほうざ  
えん、爾は萬有の主宰、天と地、見ゆると見えざる萬物の主、光榮の寶座

ざ ふち かんが はじめ み べ はか べ かたど べ かわ  
に坐し、淵を鑒み、始なく、見る可からず、測る可からず、象る可からず、變

もの わ しゅ おおい かみおよ きゅうせいしゅ われら たのみ  
らざる者、我が主イイススハリストス、大なる神及び救世主、我等の恃な

もの ちち かれ なんぢ しせん ぞう どうけい しるし おのれ うち なんぢちち あらわ  
る者の父なり、彼は爾が至善の像、同形の印、己の中に爾父を顯

もの せいかつ ことば まこと かみ えいえん ちえ いのち せいせい のうりよく まこと ひかり  
 す者、生活の言、眞の神、永遠の智慧・生命・成聖・能カ力・眞の光  
 かれ よ せいしんあらわ すなわちしんじつ しん ぎし おんし しょうらい  
 なり、彼に因りて聖神現れたり、乃眞實の神、義子とする恩賜、将来の  
 しきょう へいし えいふく はじめ せいかつ ほどこ ちから せいせい いづみ ことごと  
 嗣業の聘質、永福の始、生活を施す力、成聖の泉なり、悉くの  
 ゆうげんゆうち ぞうぶつ かれ かた なんぢ ほうじ なんぢ えいえん さんえい けん  
 有言有智の造物は、彼に固められて爾に奉事し、爾に永遠の讚榮を獻  
 けだしばんゆう なんぢ つと てんし てんしそう ほうざ しゅせい しゅりよう けんべい  
 ず、蓋萬有は爾に務む、天使・天使首・寶座・主制・首領・權柄・  
 のうりよく たもく なんぢ さんび なんぢ めぐ た おのの  
 能力・多目のヘルヴィムは爾を讚美し、セラフィムは爾を環りて立つ、各  
 りくよく によくそのおもて おお によくそのあし おお によく もつ と と  
 六翼あり、二翼其面を蔽い、二翼其足を覆い、二翼を以て飛び、緘ぢざる  
 くち もだ さんえい もつ たがい あいよ  
 口、黙ざざる讚榮を以て互に相呼ぶ、)

司祭) 凱歌を歌い、讐び、叫びて曰う、

せ 聖 い、 聖 い、 聖 い、 聖 い、 聖 い、 聖 い、 聖  
 聖 なるしゅ 主 せ い な るしゅ 主 サ ヴァオ フ、 て んち 地  
 に な んぢ の こ うえ いはあ ま ね し 、 い と た 高  
 爾 光 榮 遍  
 か き に オ サ ンナ 、 い と た か き に オ サ ン  
 ナ 。

しゅの な に て き た る も の の は 、 しゅの  
 主 名 來 者 の は 、 しゅの  
 な に て き た る も の の は あ が  
 名 來 者

めあがめほ讃めらる、いとた高。  
かきにオサンナ、いとた高。  
かきにオサンナ。

司祭) ( 黙誦: ひとあいしゅさい われらつみ ものこふくぐんともよい なんぢ ひと かなまことしせいかななんぢせいいいげんはかがたなんぢことごとは聖なる哉、誠に至聖なる哉、爾が聖位の威嚴は測り難し、爾は悉

しわざせいぎまことしんばんもつことごとわれらほどこよくの行為に聖なり、義と眞の審判とを以て悉く我等に施ししに因る、

けだしかみなんぢちちりとひとつくなんぢぞうもつこれとうと蓋神よ、爾は地より塵を取りて人を造り、爾の像を以て之を貴くし、

これかんびちどうおこれなんぢいましめまもためしいのちえい之を甘美なる地堂に置き、之に爾の誠を守るが爲に、死せざる生命と永

ふくたのしみやくたましかかれなんぢかれつくまことかみそむ福の樂とを約し給えり、然れども彼は、爾彼を造りし眞の神に背き、

へびいざないまよおのれつみころかみなんぢぎしんばん蛇の誘に迷わされ、己の罪に殺されしにより、神よ、爾は義の審判を

もつかれちどうこよおいかれつくためとかれつくためとつちかえ以て彼を地堂より此の世に逐い出だし、彼を造るが爲に取りたる土に歸し、

なんぢ爾のハリストスを以て、彼が爲に復生の救を設け給えり、至善者よ、蓋

なんぢおわりいたなんぢつくものかおさなんぢてしわざわす爾は終に至るまで、爾が造りし物より顔を避けず、爾が手の行為を忘れ

すなわちなんぢじんじあわれみよたほうもつこれかえりよげんしゃつかわず、乃爾が仁慈の憐に因りて、多方を以て之を顧み、預言者を遣

なんぢせいじんるいだいなんぢよろこものもついのうおこななんぢぼくしょし、爾の聖人、累代爾を喜ばしし者を以て異能を行ひ、爾の僕諸

よげんしゃくちもつわれらつあらかじしようらいすくいしほうりつたま預言者の口を以て我等に告げて、預め将来の救を知らしめ、法律を賜

たすけしよてんしたしゅごしやときみおよわれらついて助となし、諸天使を立てて守護者となし、時の満つるに及びて、我等に告

なんぢこもつなんぢかれもつよよつくかれなんぢこうえいぐるに爾の子を以てせり、爾は彼を以て世世を造れり、彼は爾が光榮の

ひかりなんぢせいいしょうぞうかれそのうりよくことばばんぶつふち光、爾が聖位の肖像なり、彼は其能力の言にて萬物を扶持して、

おのれなんぢかみちちひとせんしかえいざいかみちあらわ己を爾神・父に匹しくするを僭とせず、然れども永在の神にして地に顯

れ、人と偕に在し、聖なる童貞女より身を取り、己を虚くし、僕の形を  
 受け、我等の卑賤の體に肖たる者となり給えり、我等を其光榮の形に肖た  
 る者となさんが爲なり、蓋人に因りて罪は世に入り、罪に因りて死も亦入り  
 しにより、爾の獨生子、爾神・父の懷に居る者は、婦即聖なる童  
 貞女・永貞童女マリヤより生れ、法律の下に在りて、甘じて己の身に於  
 て罪を擬定せり、アダムの中に死する者が爾のハリストスの中に復生せん爲  
 なり、彼は此の世に居り、救を施す誠命を賜い、我等を偶像の惑より脱  
 し、我等を導きて爾眞の神・父を知るに至らしめ、我等を、選を蒙る  
 族、王たる神品、聖なる民として己に獲て、水を以て我等を淨め、聖神  
 を以て聖にし、己を贖として、我等罪の下に賣られたる者を繫ぎし所  
 の死に予え、己を以て萬有を充満するが爲に、十字架に由りて地獄に降  
 り、死の病を釋き、第三日に復活して、凡の肉體の爲に死より復活す  
 る途を啓き、(蓋腐敗は生命の首を繫ぐ能わず)死者の中より首生する  
 者として、死せし者の中に首實の果となれり、親ら萬有の中に萬事の首始  
 たらんが爲なり、天に升り、爾が至大位の右に其高きに坐し、再び來り  
 て、各人に、其行に依りて報い給わん、彼は我等に其救を施す苦  
 の記憶を遺せり、即此の我等が彼の誠に因りて獻げし所の者なり、  
 けだしおのれせかいいのちためわたよそのじゆうえいえんきおくいのち  
 蓋己を世界の生命の爲に付しし夜、其自由にして永遠に記憶すべき生命  
 を施すの死に出づるに臨みて、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、爾  
 神・父に捧げ、感謝し、祝讚し、成聖し、撃きて、)  
 司祭) 其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、取りて食え、是我が體、爾等の爲に擘かる  
 る者、罪の赦を得るを得るを致す、



司祭) ( 黙誦: 同く葡萄汁を盛る爵を取りて水を和し、感謝し、祝讃し、成聖して、 )

司祭) そのせい もんとおよ しと あた い みなこれ の これわれ しんやく ち なんぢらおよ  
其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び  
衆くの人の爲に流さるる者、罪の赦を得るを得るを致す、



司祭) ( 默誦: これ おこな われ きおく けだしなんぢらこ へい くら こ しゃく の ごと  
此を行いて我を記憶せよ、蓋爾等此の餅を食い、此の爵を飲む毎に、

われ し つた われ ふくかつ みと しゅさい ゆえ われら かれ すくい ほどこ  
我の死を傳え、我の復活を認む、主宰よ、故に我等も、彼が救を施す  
くるしみ いのち ほどこ じゅうじか みつか ほうむり し ふくかつ てん のぼ こと なんぢ  
苦、生命を施す十字架、三日の瘞、死よりの復活、天に升る事、爾  
かみ ちち みぎ ざ こと こうえい おそ かれ さいど こうりん きおく  
神・父の右に坐する事、光榮にして畏るべき彼が再度の降臨を記憶して、 )

司祭) 爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、

しゅ や な んぢ を あ が め う た い 、 しゅ  
主 爾 読 歌 主  
や な んぢ を あ が め う た い 、 な んぢを ほ  
爾 読 歌 爾 讀  
め あ げ 、 な んぢ を ほ め あ げ 、  
揚 爾 讀 扬  
な んぢ に かん し ザ し 、 な んぢ に か  
爾 感謝 爾 感  
し ゅ し 、 わ ガ が か  
謝 我 神 神  
い の る 、 わ ガ が か  
禱 我 神 神  
い の る 、 わ ガ が か  
禱 我 神 神  
い の る 、 わ ガ が か  
禱 我 神 神

司祭) 黙誦: 至聖なる主宰よ、是を以て我等も堪えるざる僕、我等の義に因るに非ず、(蓋

地に在りて何の善をも爲さず) 乃爾が厚く我等に注ぎし爾の慈憐と宏

恩とに依りて、爾の聖なる祭壇に奉事するを獲し者は、敢て爾の聖なる

さいだんちかなんぢせいだんほうじえものあえなんぢせい 祭壇に近づき、爾がハリストスの聖體聖血の真像を獻げて爾に祈り、

なんぢよしょせいせいものなんぢしそんじんあいよなんぢせいしん爾を籲ぶ、諸聖の聖なる者よ、爾が至善の仁愛に藉りて、爾の聖神を

我等及び此の奠えたる祭品に臨ましめ、之に祝福し、之を聖にし、之を

あらわ顯して、)

司祭) 默誦: 第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、潔

こころわれつくただたましいわれうちあらたたま、だいさんじなんぢしき心を我に造り、正しき靈を我の衷に改め給え、第三時に爾の至

せいしんなんぢしどつかしそんしゅこれわれらとあなか聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐること勿れ、

なおわれらなんぢいのものうちこれあらたわれなんぢかんばせお尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、我を爾の顔より逐うこと

なかなんぢせいしんわれとあなかだいさんじなんぢしせいしん勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐること勿れ、第三時に爾の至聖神を

なんぢしどつかしそんしゅこれわれらとあなかなおわれら爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐること勿れ、尚我等

なんぢいのものうちこれあらた爾に祈る者の衷に之を新にせよ、)

司祭) 此の餅を將て、主・神・我等の救世主イイススハリストスの眞の尊體と爲し、ア

ミン。此の爵を將て、主・神・我等の救世主イイススハリストスの眞の尊血、ア  
ミン、世界の生命の爲に流されし者と爲し、アミン。爾の聖神を以て之を變化せよ、  
アミン。アミン。アミン。

( 黙誦：我等衆人一餅一爵を領くる者を、惟一の聖神に體合するを以て  
互に和合せしめ、我が中一人も、爾がハリストスの聖體聖血を領くるを以  
て、審案或は定罪を得るを致す勿れ、乃我等に古世より爾の喜を  
爲しし諸聖人・元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・傳道者・福音者・致  
命者・表信者・教師、及び凡そ信を以て終りし義なる靈と偕に、慈  
憐と恩寵とを獲せしめ給え、 )

**司祭** 特に至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ  
リヤと偕に、

【 常に福に代えて 】

おんちゅうをみちこうむるものよ、かみのつかいの  
恩寵 満蒙者 神使

むれとひとのやからはみな、なんぢ  
群人族 群爾

をよろこぶ。なんぢはせいせられしでん、  
喜 爾 聖 殿

ちえなるてんどう、どううていちよのほまれ  
知慧 天堂 童貞女 譽

なり、よのなきさきよりわがかみ  
世無前 我神

なるもの、なんぢよりみをうけ、みどりご  
者 爾 身受 嬢 児

となれり、なんちのふところをほうざと  
 爾 胎 寶 座  
 なし、なんちのはらをてんよりひろきも  
 爾 腹 天 廣 者  
 のとなせり。おんちょうをみちこうむるもの  
 恩寵 滿 蒙 者  
 よ、ばんぶつなんぢをよろこぶ、  
 萬 物 爾 喜  
 こうえいはなんぢのものなり。  
 光榮 爾

司祭) ( 默誦: 聖預言者・前駆・授洗イオアン、光榮にして讃美たる聖使徒、( 某 ) 及

なんぢしょせいじんともじれんおんちょうえたまかみかれらきとう  
び爾が諸聖人と偕に、慈憐と恩寵とを獲せしめ給え、神よ、彼等の祈禱

よわれらかえりならびおよえいせいふくかつのぞみいだねむりものき  
に因りて我等を顧み、並に凡そ永生の復活の望を懐きて寝りし者を記

おくたま  
憶し給え、

かみぼくひ(某)の救贖・眷顧・諸罪の赦の爲に禱る、

かみぼくひ(某)の靈の安息の爲、之を光る處、悲と歎との

とおところおためいのわかみかれらなんぢかんばせひかりてら  
遠ざかる所に置くが爲に禱る、我が神よ、彼等を爾が顔の光の照す

ところあんちあんそくたま  
所に安置安息せしめ給え、

またなんぢいのしゅなんぢせいこうしどきょうかいせかいはてはていた  
又爾に禱る、主よ、爾の聖・公・使徒の教會、世界の極より極に至

ものきおくなんぢとうとちえところものへいあんおよ  
る者を記憶し、爾がハリストスの尊き血にて獲し所の者を平安にし、及

こせいどうけんごよおわりいたたましゅこさいぶつなんぢ  
び此の聖なる堂を堅固にして世の終に至らしめ給え、主よ、此の祭物を爾

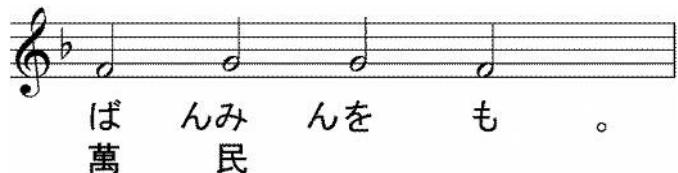
ささげものおよそのだれためだれもつだれかわささげきおく  
に獻げし者、及び其誰が爲に、誰を以て、誰に代りて獻しを記憶せよ、

しゅなんぢしょせいどうものたてまつぜんぎょうおこなおよひんしゃきおく  
主よ、爾の諸聖堂に物を獻り、善業を行ひ、及び貧者を記憶す

ものきおくなんぢゆたかてんじょうおんしもつかれらむくてんもの  
る者を記憶して、爾が豊なる天上の恩賜を以て彼等に酬い、天の物を  
もつちものかふきゅうものもつふはいものかかれらたましゆ  
以て地の物に易え、不朽の物を以て腐敗の物に易えて彼等に賜え、主よ、  
こうやさんれいがんけつちくつあものきおくしゆどうていけいけんきんしょく  
曠野・山嶺・巖穴・地窟に在る者を記憶せよ、主よ、童貞・敬虔・禁食・  
けつじょうもついのちわたものきおくしゆわくにてんのうなんぢこち  
潔淨を以て生を度る者を記憶せよ、主よ、我が國の天皇、爾が斯の地  
おうよみものきおくしんじつぶぐじんじぶぐかれおおたか  
に王たるを嘉せし者を記憶し、眞實の武具仁慈の武具を彼に佩ばしめ、戰  
ひおいそのこうべおおそのひぢつよそのみぎてたこそのくにけんご  
の日に於て其首を廢い、其臂を強くし、其右の手を高うし、其國を堅固  
およたかいいほついほうみんかれきふくうばふか  
にし、凡そ戰を欲する異邦民を彼に歸服せしめ、奪うべからざる深き  
へいあんかれたまかれこころなんぢきょうかいためおよなんぢしゅうじんため  
平安を彼に賜い、彼の心に爾が教會の爲、及び爾が衆人の爲に  
ぜんじつたまかれへいわわれらおよそけいけんけつじょうもつてん  
善事を告げ給え、彼の平和により、我等が凡の敬虔と潔淨とを以て、恬  
せいあんぜんいのちわたためしゆくにつかさどものきおくぜん  
静安然として生を度らんが爲なり、主よ、國を司る者を記憶せよ、善  
ものぜんまもあくものなんぢじんじもつぜんものなたましゆ  
なる者を善に守り、惡なる者を爾の仁慈を以て善なる者と爲し給え、主よ、  
ここたしゆうじんおよやあたゆえよきたものきおくなんぢじ  
此に立つ衆人、及び已む能わざる故に因りて來らざる者を記憶し、爾が慈  
れんおおよかれらわれらあわれたまかれらくらもろもろよきものみ  
憐の多きに因りて、彼等と我等とを憐み給え、彼等の庫に諸の善物を盈  
かれらふうふへいわどうしんまもみどりごよういくしようねんくندou  
たし、彼等の夫婦を平和と同心とに護り、嬰児を養育し、少年を訓導  
ろうしゃふちこころせばものなぐささんものあつまよ  
し、老者を扶持し、心狭みたる者を慰め、散じたる者を聚め、迷わされ  
ものかえなんぢせいこうしつきょうかいあたまおきくるし  
し者を歸して、爾が聖・公・使徒の教會に合わせ給え、汚鬼に苦めらる  
ものとこうかいものともこうかいりょこうものともりょこうやもめ  
る者を釋き、航海する者と偕に航海し、旅行する者と偕に旅行し、嫠婦を  
かばみなしごまもとりこものすくやまいうれものいやたまかみ  
庇い、孤子を護り、擄となりし者を救い、病を患うる者を醫し給え、神  
さいばんこうさんるざいくえきおよおようれいなやみあやうきおものき  
よ、裁判・鑛山・流罪・苦役、及び凡そ憂愁と患難と危難とに居る者を記  
おくしゅわかみおよなんぢおおいあいれんもとものまたわれらあい  
憶せよ、主我が神よ、凡そ爾の大なる愛憐を求むる者、又我等を愛す  
ものわれらにくものわれらあたものかわいのたくものおよなんぢ  
る者、我等を惡む者、我等當らざる者に代り祈るを託せし者、及び爾の  
しゅうじんきおくしゅうなんぢゆたかじれんそそしゅうそのもとところおよ  
衆人を記憶し、衆に爾の豊なる慈憐を注ぎ、衆に其求むる所、凡  
すくいためせつようものあたたまかみわれらしあるいはわす  
そ救の爲に切要なる者を予え給え、神よ、我等知らざるにより、或は忘  
あるいはなおおきおくものなんぢかくじんせいちょうせい  
るるにより、或は名の多きによりて記憶せざる者は、爾各人の生長と姓

めいし おのおのひと そのはは たいない し もつ みづか これ きおく  
 名とを知り、各人を其母の胎内より知るを以て、親ら之を記憶せよ、  
 けだししゅなんぢたすけものたすけのぞみもの のぞみ たいふう あ もの きゆう  
 蓋主よ、爾は助なき者の倚助、望なき者の冀望、颶風に遭う者の救  
 しや こうかい もの みなと やまい うれ もの いし なんぢみづか しゅうじん ため  
 者、航海する者の埠、病を患うる者の醫師なり、爾親ら衆人の爲  
 おのおのそのもと ところ たま けだしかくじん し そのねがい そのいえ そのもとめ  
 に、各其求むる所となり給え、蓋各人を知り、其願と其家と其需  
 し しゅ こ まち ちほう ききん えきびよう ぢしん すいなん かなん  
 とを知ればなり、主よ、此の都邑と地方とを、饑饉・疫病・地震・水難・火難・  
 けんなん がいこう ないらん すぐ たま  
 劍難・外攻・内亂より救い給え、 )

**司祭)** しゆ こと きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう きおく  
 主よ、殊に教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィムを記憶し、  
 かれ へいあん ぶなん そんき そうけん ちょうじゅ もの およ なんぢ しんじつ ことば ただ つた  
 彼を平安・無難・尊貴・壯健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳う  
 もの なんぢ せい きょうかい あた たま  
 る者として、爾の聖なる教會に與え給え、



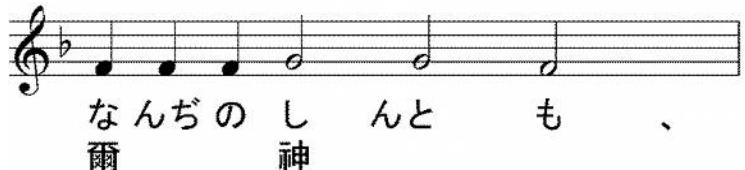
**司祭)** ( 黙誦: 主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正教者の凡の主教品を記憶  
 しゆ なんぢ しんじつ ことば ただ つた せいきょうしゃ およそ しゅきょうひん きおく  
 せよ、主よ、爾が慈憐の多きに因りて、我不當の者をも記憶し、我に凡そ  
 じゆう じゆう ざいか ゆる たま わ しょざい よ なんぢ せいしん  
 自由による自由によらざる罪過を赦し給え、我が諸罪に因りて、爾が聖神  
 おんちよう そな さいひん のぞ とど なか しゆ しさいひん  
 の恩籠の奠えたる祭品に臨むを遏むる勿れ、主よ、司祭品、ハリストスに  
 よ ほさいひん およ ことごと しんびん きおく われらなんぢ せい さいだん めぐる  
 因る輔祭品、及び悉くの神品を記憶し、我等爾の聖なる祭壇に環り立  
 もの うち ひとり はぢ う なか しゆ なんぢ じんじ もつ われら かえり  
 つ者の中、一をも羞を承けしむる勿れ、主よ、爾の仁慈を以て我等を顧  
 なんぢ ゆたか おんけい もつ われら あらわ じゅんわ りえき な きこう  
 み、爾の豊なる恩恵を以て我等に現れ、順和にして利益を爲す氣候を  
 われら たま ち ほうさく な かんう たま なんぢ おんたく もつ とし こうむ  
 我等に賜い、地の豊作を爲す甘雨を賜い、爾の温澤を以て年に冠らし、  
 なんぢ せいしん ちから もつ しょきょうかい ぶんき おさ いほうみん きょうぼう しづ  
 爾が聖神の力を以て諸教會の分岐を治め、異邦民の驕暴を鎮め、  
 しょいたん ふんき すみやか やぶ たま わ かみ われらしゅうじん なんぢ くに い  
 諸異端の紛起を速に壞り給え、我が神よ、我等衆人を爾の國に入れ  
 ひかり こひる こ あら なんぢ へいあん なんぢ あい われら たま けだし  
 て、光の子晝の子と顯わし、爾の平安と爾の愛とを我等に賜え、蓋  
 なんぢ ばんじ もつ われら あた  
 爾は萬事を以て我等に予えり、 )

**司祭)** ならび われら くち いつ こころ いつ なんぢちち こ せいしん しそんしげん な  
 並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を

さんえいさんしよう 講 燦 講 頌するを賜え、今も何時も世世に、



司祭) ねがわ おおい かみ わ きゅうしゅ あわれみ なんぢしゅうじん とも あ  
願くは 大なる神、我が救主イイススハリストスの憐は、爾衆人と偕に在ら  
んことを、



### 【 増聯禱 】

司祭) われらしょせいじん きおく またまたあんわ しゅ いの  
我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、



司祭) すでに獻ぜられ及び聖にせられし尊き祭品の爲に主に禱らん、



司祭) ひとあい わかみが、これそのせい てんじょう むけい さいだん おぞくしん けいこう  
人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と  
して享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、



司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの  
我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが爲に主に禱らん、



司祭) かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すぐ あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭) 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む



司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) 我等の生命の終がハリストニアニに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び  
ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) 信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、並  
に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んち に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦: 我が神 救 の神よ、爾 が已に我等に賜い、今も賜う所 の諸恩の爲に、  
當然に爾 に感謝するを我等に訓え給え、我が神、此の獻 物を享けし主よ、  
爾 我等を靈體の諸 の汚 沢より淨め、爾 を畏るる心 を以て聖事を  
行 うを教え給え、願くは我が 良 心の淨き 證を以て爾 が聖品の分を  
領けて、爾 がハリストスの聖 體 血に體合し、並に當然に之を領くるに藉り  
て、ハリストスが我等の 心 に居るを得、及び爾 が聖 神の堂とならん、嗚呼我  
が神よ、我等の中一人をも、此の爾 の畏るべき天 上の機密の前に罪を獲せ  
しむる勿く、又 宜しきに合わずして之を領くるに依りて、靈體の病むを致さし  
むる勿れ、乃 我等が呼吸の絶えんとするに至るまで當然に爾 が聖品を領  
くるを以て永 生の引導となし、爾 がハリストスの畏るべき審 判の時に善く  
容れらるる對 となすを得せしめ給え、我等も古世より爾 の 喜 を爲しし諸  
聖人と共に、主よ、爾 を愛する者の爲に備うる所 の爾 が永遠の福樂  
に 與 る者となるが爲なり、 )

### 【 天主經 】

司祭) 主宰よ、我等に勇 を以て、罪を獲ずして、敢て爾 天の神父を籲びて言うを賜え、

てんに い ま す わ れ ら の ち ち よ 、 ね が わ く は  
天 在 我 等 父 願

なんち の な は せ い と せ ら れ 、 なんち の く に は  
爾 名 聖 爵 國

き た り 、 なんち の む ね は てん に お こ な わ る る  
來 爵 旨 天 行

がごとくちにもおこなわれん。わがにちよう  
 如 地 行 我 日 用  
 のかてをこんにちわれらにあたえたまえ。  
 糧 今 我 等 與 給  
 われらにおいめあるものをわれらゆるすがご  
 我 等 債 者 我 等 免 如  
 とく、われらのお債いめをゆるしたま  
 我 等 債 免 給  
 え。われらをいざないにみちびかず、  
 我 等 誘 導  
 なおわれらをきょうあくよりすくいたま  
 猶 我 等 凶 惡 救 給  
 え。

司祭) 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

アミン。

司祭) 衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 爾等の首を主に屈めよ、

しゅなんぢに。  
 主 爾

司祭) ( 黙誦: 主宰・主・慈憐の父、凡の撫恤の神よ、其首を屈めし者に福を降  
 し、之を成聖し、之を保護し、之を堅固にし、之を健立し、之を凡の惡事  
 より離して凡の善事に合せ、並に之に定罪なく、此の爾が至淨なる  
 生命を施す機密を領けしめて、罪の赦、聖神の體合を得せしめ給え、 )  
 司祭) 爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命  
 を施す爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世世に

アミン。ア ミ ン。

司祭) ( 黙誦: 主イイススハリストス我等の神よ、爾の聖なる住所と爾が國の光榮の寶  
 座より眷み給え、上には父と偕に坐し、此には見えずして我等と偕に居る者よ、  
 來りて我等を聖にし、爾の權能の手を以て、爾が至淨の體と至尊の血と  
 を我等に授け、又我等を以て衆人に授け給え、 )

司祭) 謹みて聽くべし、聖なる物は聖なる人に、

せいなるはただひとり、しゆなるはただ唯一、ひとり、かみちのこうえいをあらわす  
 聖 唯 獨 主 唯 獨 神 父 光 荣 顯  
 イイスハリストスなり、アミン。

司祭) ( 黙誦: 神の羔は剖かれ分たる、彼は剖かれて分離せず、恒に食われて永く盡き  
 ず、乃領くる者を聖にす、 )

※信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

(奉事規程の指定は【 主日領聖詞 】、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以

下をアンティフォン形式で歌う、若しくは誦經する。本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。

日本正教会では神品領聖時に【主日領聖詞】に代えて、早課イルモス（その週の調、または生神女のカタワシヤ等）、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。  
歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。 )

キノニク  
【主日領聖詞 第148聖詠】

てん んよ りしゅ を ほ め あげ よ いと たか  
天 感 者 主 讚 美 揚 、 至 高  
きに か れ を ほ め あげ よ 。  
彼 讚 揚

句) 其悉くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其悉くの軍よ、彼を讃め揚げよ。

句) 日と月よ、彼を讃め揚げよ、悉くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。

句) 諸天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。

句) 主の名を讃め揚ぐべし、蓋彼言いたれば、即成り、命じたれば、即造られたり、彼  
は之を立てて世世に至らしめ、則を與えて之を踰えざらしめん。

句) 地より主を讃め揚げよ、大魚と悉くの淵、火と霞、雪と霧、主の言に従う暴風、  
山と悉くの陵、果の樹と悉くの栢香木、野獸と諸の家畜、匍う物と飛  
とり、ちしょおうばんみんぼくはくちしょゆうし、しょうねんしょぢょおきなわらべ、しゅな  
ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年と處女、翁と童は、主の名  
を讃め揚ぐべし、蓋惟其名は高く擧げられ、其光榮は天地に徧し。

句) 彼は其民の角を高くし、其諸聖人、イズライリの諸子、彼に親しき民の榮を高く  
せり。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。 )

【信徒領聖】

司祭) 神を畏るる心と信とを以て近づき來れ、

かみおそこころしんもつちかきた  
神を畏るる心と信とを以て近づき來れ、

しゅのなによりてきたるものはあがめほ讚  
主名因來者のはあがめほ讚



全員) しゅ われしん かう みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく  
主よ我信じ、且つ受け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが

ため よ きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ し  
爲に世に來りし者となす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃爾が至

じよう たい こ すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゆう  
淨の體、此れは乃爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由

じゆう ことば おこない し し おか しょざい ゆる たま ならび  
と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並

われ ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた たま  
に我に定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦と永生を得るを得るを致させ給

え、アミン。

かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ き  
神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機  
みつ つ なんぢ ごと せつぶん な すなわちうとう ごと なんぢ う  
密を告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承  
みと い しゅ なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ  
け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと。主よ、祈る爾の聖なる機密を  
う わ ため しんあんあるいは ていざい れいたい いやし  
領くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、ア  
ミン。

### 【(大パスハ) キノニク 領聖詞】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。

パリストスのせいたいをうけ、ふ死のいづみ  
聖體領不<sup>死</sup>のいづみ  
をのめよ。

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができるから「アリルイヤ」を歌う。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイ  
ヤ。

司祭) ( 黙誦: ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を捧むべし、ハ

リストスよ、我等爾の十字架を捧み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾

は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、

みなきて皆來りてハリストスの聖なる復活を捧むべし、十字架にて喜は全世界に

のぞ臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架

に釘うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、

あらた新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオン

よ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を

よろこび給え、

ああおおいにして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾

が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せら

ものしょざいあらたましゅわかみわれらなんぢしじょうふし天

れし者の諸罪を滌い給え、主我が神よ、我等爾が至淨にして不死なる天

じょうせいきみつなんぢわれられいたいしおんせいせいいりょうたまところもの

上の聖機密、爾が我等の靈體の施恩・成聖・醫療として賜いし所の者

うよなんぢかんしゃばんゆうしゅさいなんぢみづかわれらなんぢ

を領くるに因りて爾に感謝す、萬有の主宰よ、爾親ら我等が爾のハリ

ストスの聖體血を領くるを以て、其耻を得ざる信、偽なき愛、睿智の増益、

れいたいいりょうしょてきくちくなんぢいましめじゅんしゅならびなんぢ

靈體の醫療、諸敵の驅逐、爾が誠の順守、並に爾がハリストスの

おそしんばんおいよいこたえいたたま畏るべき審判に於て善く容れらるる對となるを致させ給え、)

司祭) 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、

わ  
れ  
ら  
す  
で  
に  
ま  
こ  
と  
の  
ひ  
か  
り  
を  
み  
觀  
て  
、  
て  
ん  
の  
天  
  
せ  
い  
し  
ん  
を  
う  
け  
、  
た  
だ  
し  
き  
し  
ん  
を  
え  
て  
、  
、  
聖  
神  
を  
受  
信  
得

わかれざるせいさんしやをおがむ、かれわれ  
 分聖三者を拜む、かれわれ  
 らをすくいたまえばなり。  
 等救給

司祭) 黙誦: 神よ、願くは爾は諸天の上に擧げられ、爾の光榮は全地を蔽わん、我らの神は恒に崇め讃めらる、

司祭) 今も何時も世世に、



しゆよ、ねがわくはわがくちはさんびにみてら  
 主願我口讃美満  
 れて、われらなんぢのこうえいをうた  
 我等爾光榮歌  
 わん。なんぢわれらに、しんせいにしてふし  
 爾我等神聖不死  
 なるいのちをほどこすなんぢのせいきみ  
 生命を施せす爾聖機密  
 つをうくるをゆるせばなり。いのるわ我  
 領許  
 れらをなんぢのせいせいにまもり、しゅうじ  
 等爾成聖に護り、終日  
 つなんぢのぎをならわしめたまえ  
 爾義習



司祭) つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい  
謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖

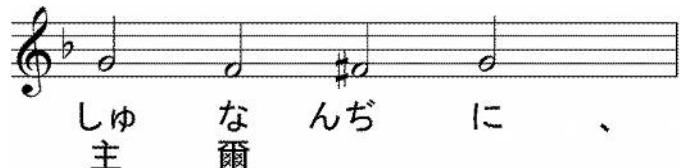
機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救い憐み護れよ、

司祭) 此ひの純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に

おのののみもつならびことごとわれらいのちもつ もとわれらおのれみおよたがい  
各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) 蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世

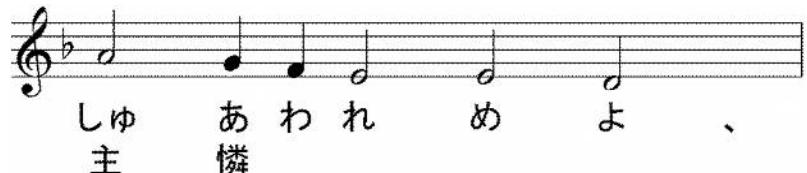
に、



司祭) 平安にして出づべし、



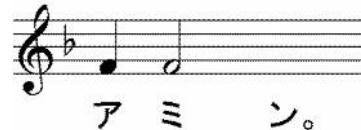
司祭) 主に禱らん、



司祭) なんちさんようものふくくだおよなんちたのものせいしゅなんちたみすく  
爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救

い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充満を守り、爾が堂の美なるを

あい もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの  
 愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む  
 もの のこ なか なんぢ せかい なんぢ しょきょうかい しょしさい わくに てんのうおよ くに  
 者を遺す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を  
 つかさど ものおよ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび  
 司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる  
 たまもの うえ なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢち  
 賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拝を爾父と  
 こせいしんけん いま いつ よよ  
 子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよ  
 願 主名 崇 講  
 りよよにいたらん。ねがわくはしゅのなはあが  
 世世 至 願 主名 崇  
 めほめられていまよりよよにいたらん。ねが  
 講 今 世世 至 願  
 わくはしゅのなはあがめほめられていまよりよ  
 主名 崇 講 今 世  
 よにいたらん。  
 世 至

誦經 我何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が靈は主を以  
 て誇らん、溫柔なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇め讃  
 めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免れし  
 め給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の貧し  
 ものよき者呼びしに、主は聆き納れて、之を其悉くの艱難より救えり。主の使は主を畏  
 るる者を環り衛りて、彼等を援く。味えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃む人

は 福 なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏しきことなし。少

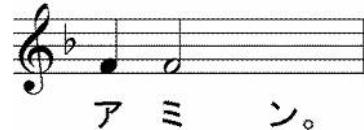
き獅子は乏しくして餓え、唯主を尋ねる者は何の幸福にも缺くるなし。

司祭) ( 黙誦: 親ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制を悉く成満せ

しハリストス我が神よ、常に我等の心を喜びと樂とに成満せしめ給え、

いまいつよよ  
今も何時も世世に、 )

司祭) 願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も  
よよ  
世世に、



※もし永眠者記憶を続けて行う場合はP38【 永眠者の爲の熱衷祈祷 リティヤ】に飛ぶ。

### 【通常の終結】

司祭) ハリストス神我等の持よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
光榮父 子聖神歸今  
いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ  
何時世世主憐主  
あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ  
主憐  
せ。

司祭) 死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、光榮にして讃美たる

せいしと われら せいしんぶ だいしゅきょうせいだい こくしょうほう  
聖使徒、我等の聖神父カッパドキヤのケサリヤの大主教聖大ヴァシリイ、克肖捧

しん神なるわがしょしんぶ およ しょせいじん きとう より われら あわれ すぐ ぜん  
神なる我諸神父、(某) 及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん。善にし

ひと あい しゅ  
て人を愛する主なればなり、



アミン。

A musical score in G clef, common time, featuring five staves of music. The lyrics are written below each staff in both Japanese and English. The Japanese text is a traditional hymn, and the English text is a translation. The music includes various note values such as eighth and sixteenth notes, and rests. Measure numbers are indicated at the beginning of each staff.

かみよ、わがくにのてんのう、および及  
神 我國 天皇 う、および及

くにをつかさどるもの、われらのふしゆ  
國 司 者 我等 府主

きょうセラファイム、およびことごとくのせいきょう  
教 及 悉 正教

のハリストニアニラ等 を、いくとせにもまもり  
ハリストニアニラ等 を、いくとせにもまもり

たまえ。

〈 聖体礼儀終了 十字架接吻 〉

【 永眠者の爲の熱衷祈祷 リティイヤ】

ひとをあいするきゅうせ いしゅよ、しせしぎ  
人愛救世主、死義

じんのたましいとともに、なんちがぼくひの  
人靈偕爾僕婢

たましいをやすんぜしめて、かれらを  
靈安彼等

なんちにあるふくらくのいの生ちに、まもり  
爾在福樂の生命、まもり

たまえ。しゅよなんちがしょせいじんのあん  
給主爾諸聖人安

そくするところに、なんちがぼくひのたま  
息處爾僕婢靈

しいをやすんぜしめたまえ。なんちひとりひ人  
安給爾獨

とをあいするしゅなればなり。  
愛主

こうえいはちちとことせいしんにきす、  
光榮父子聖神歸

なんちはぢごくにくだりてつながれしもの  
爾地獄降繫者

くさりをときたるかみなり。みづから  
鎖釈神親

なんぢが ぼくひのたましいをやすんぜしめ  
 爾 僕 婢 靈 安  
 たまえ。  
 いまもいつもよよに、アミン。  
 今 何時 世世

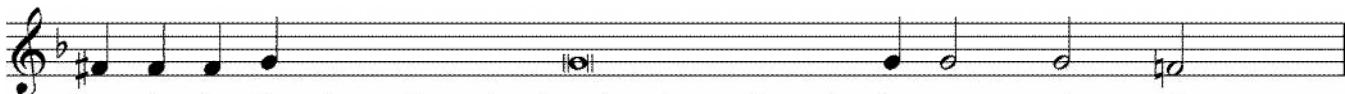
ひとりいさぎよくきずなきどうていぢよ、たね  
 獨 潔 瑕 童 貞 女 種  
 なくしてかみをうみしものよ、かれらの  
 神 生 者 彼 等

たましいのすくわれんことをいのりたま  
 靈 救 祈 給  
 え。

### 【重聯禱】

司祭) 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、  
 しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主憐 主憐 主憐  
 司祭) 又寝りし神の僕婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざ  
 る罪の赦されんが爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主憐 主憐 主憐  
 司祭) 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主憐 主憐 主憐

司祭)かれらかみあわれみてんごくしょざいゆるし たま わがし おうおよ  
彼等に神の憐と天国と諸罪の赦とを賜わんことを、ハリストス我死せざる王及

び神に願う、



司祭)しゅいの  
主に禱らん、



司祭)もろもろれいしんもろもろにくたいかみしほろあくまむなしなんちせかいいのち  
諸の靈神と諸の肉體との神、死を亡ぼし惡魔を虛くし、爾の世界に生命

たましゅなんちみづかねむなんちぼくひたましいひかところしげくさば  
を賜いし主よ、爾親ら寝りし爾の僕婢(某)の靈を光る處、茂き草場、

へいあんところやまいかなしみなげきとおところあんそくぜんひとあい  
平安の處、病と悲と歎との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する

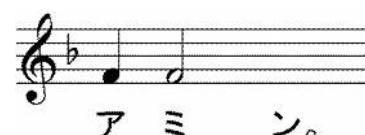
かみよりかれらあるいは言、あるいは行、あるいは思にて犯し悉くの罪を赦

たまけだしひとひとりいつみおこなものただなんちつみなんちぎえいえん  
し給え。蓋人一も生きて罪を行わざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠

ぎなんちことばしんじつけだしわれらかみなんちねむなんちぼくひ  
の義、爾の言は眞實なり。蓋ハリストス我等の神よ、爾は寝りし爾の僕婢

(某)の復活と生命と安息なり。我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善に

いのちほどこなんちしんけんいまいつよよ  
して生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世世に、



アミン。

【 永眠者の爲の小讃詞 コンダク】



もかなし みもなげ きもな く、おわ  
悲 歎 終

りな きいの ちのあるところ に やすんぜ  
生 命 處 安

しめたま え。

【 終結 】

司祭) ハリストス神我等の 恃 よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こうえいは ちちとこ とせいしんに きす、いまも  
光榮 父 子 聖 神 彌 今

いつもよよ に、アミン。しゅあわれめ、しゅ  
何時 世世 主憐 主

あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ  
憐 主憐 福 降

せ。

司祭) 死より復活し、生ける者と死せし者を其全能の手に保ち給うハリストス我等の眞の

神は、其至淨なる母、光榮にして讃美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、

(某) 及び諸聖人の祈禱に因て、寝りし僕婢(某)の靈を諸義人の住所に入

れ、アブラムの懷に安んせしめ、諸義人の列に加え、及び我等を憐み給わん。善

にして人を愛する主なればなり、



司祭) しゅ なんぢ ぼくひ( 某 )の さいわい ねむり えいえん あんそく あた かれら えいえん きおく  
主よ、爾の僕婢(某)の福なる寝に永遠の安息を與え、彼等に永遠の記憶

な たま  
を爲し給え、

え い え 遠 んの き 記 お 憶  
く え い え 遠 んの き 記  
お 憶 く え い え 遠 ん  
の き お 憶 く

【 萬壽詞 】

か 神 み よ 、 わ が 国 に の てん の 天 皇 う、 お よ び 及  
く 国 に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ  
く 司 に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ  
き ょう セ ラ フ イ ム、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょう  
教 及 こ と ご と く の せ い き ょう  
の ハ リ ス テ ィ ア ニ ル 等 を 、 い く と せ に も ま も り  
の ハ リ ス テ ィ ア ニ ル 等 を 、 い く と せ に も ま も り  
た ま え 。

( 祈祷終了、十字架接吻 )

【 領聖感謝祝文 】

神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す。

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢ われざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか もの  
主我が神や、爾我罪人を棄てずして、尚爾の聖なる機密に與る者  
いた たま なんぢ かんしや われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う  
と致させ給うを爾に感謝す、我堪えざる者に爾が至淨なる天の賜を受くるを  
ゆる たま なんぢ かんしや しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ われ  
容し給うを爾に感謝す、主宰・人を愛する主、我等の爲に死して復活し、我が  
たましい からだ おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち ほどこ  
靈と體とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を施す  
きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき がい か  
機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも靈と體とを癒し、凡の敵の害を驅  
われ こころ め あきら われ たましい ちから へいあん しはぢ え しん いつわり  
り、我が心の目を明かにし、我が靈の力を平安にし、耻を得ざる信とし、偽  
あい えいち み なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちょう ま なんぢ  
なき愛とし、睿智を充たし、爾の誠を守らしめ、爾が神聖の恩寵を益し、爾  
くに つ もの え たま われ か ごと こ きみつ なんぢ せいせい  
の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密にて爾の成聖  
まも つね なんぢ おんちょう おも またおのため せいかつ すなわちなんぢわ しゅさいおよ  
に護られ、常に爾の恩寵を思い、復己が爲に生活せず、乃爾我が主宰及  
おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ いだ こ よ はな えいえん いこい か  
び恩主の爲に生活し、以て永生の望を懐き、此の世を離れて、永遠の息、彼の  
しゅく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い つく びぜん み もの かぎ  
祝する者の絶えざる聲、及び爾が顔の言い盡されぬ美善を見る者の限りなき  
たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい もの まこと のぞみ  
樂の處に至らん、蓋ハリストス我が神や、爾は爾を愛する者の眞の望と  
い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた  
言い盡されぬ樂なり、凡そ造を受けし者は爾を世世に讃め歌う、「アミン」。

【 第二祝文 聖大ワシリイの原文 】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ およ  
主宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、凡  
われ たま ところ しょせん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま  
そ我に賜いし所の諸善、且生命を施す至淨なる爾の機密を領けさせ給いしを  
なんじ かんしや またなんぢ いの ぜん ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した なんぢ  
爾に感謝す、又爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を爾が庇の下に、爾  
つばさ かけ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ とうぜん  
が翼の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、潔き良心を以て、當然に  
なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだしなんぢ いのち  
爾の聖體聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、蓋爾は生命  
かて せいせい いづみ しょせん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい けん いま  
の糧、成聖の泉、諸善を賜う主なり、我等爾と父と聖神とに光榮を獻ず、今  
いつ よよ も何時も世世に、「アミン」。

【 第三祝文 聖シメヲン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゃ あまん おのれ み かて  
我が造成主、甘じて己の身を糧と  
われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしょ  
して我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃吾が百體諸

せつしんぶく い わ しょざい とげ や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた  
節 心 腹に入り、吾が諸 罪の棘を焚き、靈 を淨め、思 を聖にし、筋と骨とを固め、  
ごかん あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも  
五官を 明 かにし、吾が全 身を、爾 を畏るる 畏 に釘うち、常に我を庇い、我を保  
われ たましい がい もろもろ おこない ことば まも われ きよ われ あら われ  
ち、我を 灵 を害する 諸 の 行 と言 とより護り、我を淨め、我を滌い、我を  
かざ われ おさ われ ひら われ てら わ またつみ すまい てひとりなんぢ せいしん  
飾り、我を治め、我を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨 爾 が聖 神  
すまい るあらわ およそ あくしゃおよそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ  
の住所たるを顯し、凡 の悪者 凡 の慾は、我聖體の入るに依りて 爾 の家となり  
もの に ひ に ごと たま われそのてんたつしゃ もろもろ  
し者より逃ぐること、火より逃ぐるが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸 の  
せいじや しょひん てんし なんぢ せんく ちえ しと およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ  
聖者、諸品の天使、爾 の前驅、智慧なる使徒、及び爾 が無玷至淨の母を爾 に  
すす じれん しゅわ かれら きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ  
進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の祈禱を容れて、爾 の役者を光 の子となし  
たま けだしひとりしせん しゅ なんぢ われら たましい せいせい こうめい われらみなかみ  
給え、蓋 獨 至善の主や、爾 は我等の 灵 の成聖と光明なり、我等皆神と  
しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん  
主宰に宜しき所 の如く、日日に光榮を爾 に獻ず。

【 第四祝文 】 しゅ 主イイススハリストス我等の神や、願くは爾 の聖體は、我が爲に  
えいせい なんぢ そんかつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わため  
永生となり、爾 の尊血は、罪の赦 とならん、願くは此の感謝の祭 は、我が爲に  
きえつ そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ  
喜悦と壯健と安樂とならん、又 畏る可き爾 が再度の降臨の時、我罪人に、爾  
こうえい みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ  
が光榮の右に立つを得せしめ給え、爾 が至淨の母と諸聖人ととの祈禱に依りてなり。

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ちよさい しょうしんぢよ わ くら たましい ひかり  
至聖なる女宰・生神女、我が昧みたる靈 の光、  
わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ じょう  
吾が憑恃と帡幪と避所と慰藉と歡喜や、爾 が我堪えざる者に、爾 の子の至淨の  
たいしそん ちう もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり  
體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾 に感謝す、猶祈る、眞の光を  
う もの わ こころ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ  
生みし者や、吾が心の靈目を明 にせよ、不死の泉 を生みし者や、我罪に殺され  
もの い たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ こころ しょうかん ひつう  
たる者を生かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、  
わ おもい けんそん わ とりこ いねん よびかえし たま われ いき た  
吾が思に謙遜、吾が虜 となりし意念に呼 還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至  
るまで、罪を獲ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈 と體との醫を得るを致  
ならび われ つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいなんぢ かしようさんえい たま  
し、並に我に痛悔と承認との涙 を與えて、生涯爾 を歌頌 讚美せしめ給え、  
けだしなんぢ よよ さんび こうえい み こうむ  
蓋 爾 は世世に讃美と光榮とを満ち被る、「アミン」。